ESSAY

バイロンとその時代

── 英国のハロルド、アルプスのマンフレッド、そして欧州のバイロン ──

笠原 順路

英語にByronicという言葉がある。もちろん原義は「バイロン的な」という意味だが、文学事典などではないごく普通の辞書にさえ次のような但し書きが載っている――「世俗の道徳を軽視し、運命に抗するバイロンその人、またはその詩風にいう（研究社 新英和大辞典）」、「〔擬似名詞〕バイロンの作品にあるように、大げさな所作をともなって滔々と述べられた侮辱的な言葉（The Oxford English Dictionary）」。バイロンが1817年に出版した『マンフレッド』は、畢竟バイロニックな主人公がバイロニックをまくしたてる劇詩、と言ってよいだろう。

英国のハロルド

ジョージ・ゴードン・バイロンは1788年ロンドンに生まれ、10歳でノッティンガム近郊にあるニューステッド・アビーの屋敷を継ぎ、第六代バイロン卿となる。その後、名門私立学校のハロー校からケンブリッジ大学に進むが、学業に精を出すよりも社会規範を逸脱しながら社会規範を学んでいくという、当時の貴族の子弟の通例に倣って、自由奔放な生活を送る。

ケンブリッジを出たのち、1809年７月、友人と大陸旅行（グランドツアー）（当時の上流階級には、青少年期の教育の仕上げとして、ヨーロッパ文化の源流であるイタリアなどへ長期の旅行を行う風習があった）にでかけ、現在の ポルトガル、スペイン、ジブラルタル、マルタ島、アルバニア、ギリシア、小アジアなどで２年間すごす。帰国してホウィッグ党支持の貴族の名士の集まりに顔を出すようになった頃、旅行中の見聞をもとにした『貴公子ハロルドの巡礼』第１・２巻が出版され、一躍、文壇および社交界で注目を浴びることになる。1812年３月のことだ。

例の有名な言葉を吐いたのが、この時である――「ある朝目覚めたら、有名になっていた（I woke up one morning and found myself famous.）」。文壇に彗星のごとく登場した、デカダンを衒ったこのダンディ貴族詩人の周りには、社交界の多くの女性たちが、既婚、未婚を問わず、ある者は上品な交際の仮面をつけて、ある者はアヴァンチュールを求めて、群がってきた。こうしたなかに、後にバイロン夫人となる生真面目な娘アナベラ・ミルバンクや、すでにリー大佐夫人となっていた異母姉のオーガスタも名を連ねていた。

バイロンは、こうした女性たちとの交友をほしいままにしながらも、この間、地中海東部地方の旅から素材と霊感を得た物語詩を矢継ぎ早に出す。これらの物語詩には、キリスト教文化圏とイスラム教文化圏の接点に繰り広げられた熱い人間ドラマが、イギリス人のロマン的な異国趣味を掻き立てるように描かれていて、いずれも飛ぶように売れた。例えば1814年出版の『海賊』は発売当日１万部、

１ヶ月で２万５千部が市中に出たという。

しかしながら、これらの物語詩群でバイロンがなした最大の功績は、いわゆるバイロニックなヒーロー像を確立したことである。その特質は、拙稿冒頭に述べたByronicの意味に加えて、「憂鬱気味（メランコリック）で、心に暗い秘めた部分を持ち、大衆を嫌い、（しばしば世俗の道徳とは反対の）己の正義感に忠実な」と付けたせば、大体の場合に当てはまる。既に『貴公子ハロルドの巡礼』第１・２巻における語り手・ハロルドの感想が作者バイロンのそれであることを了解していた大衆読者は、これらの物語詩の主人公たちもまたバイロンの分身であるとみなし、そのなかに虚構化された時代の寵児の内面の喜怒哀楽を見てとる喜びを味わった。バイロニックなヒーローとは、大衆が自己同一視する格好の対象となったのだ。

そうしたなか1814年４月、異母姉オーガスタが女児を出産し、『海賊』の主人公の正妻と同じメドーラと名づけられた。今では、この子の父がバイロンであることは定説となっているが、当時は後の離別騒動の時でも公に話題になることはなかった。同年８月ころから、かつてバイロンの求婚を断わったことのあるアナベラ・ミルバンクとバイロンの間で、数回の手紙のやりとりがあり、アナベラがバイロンとの結婚の意志を表明し、翌1815年１月に結婚するが、結婚後もオーガスタとの関係が断ち切られることはなかった。また、バイロン自身の特異な性格も加わって、１年後にアナベラが、生後ひと月あまりのバイロンの子で、問題の異母姉と同じ名をつけられた、オーガスタ・エイダをつれて実家へ帰る。

アナベラを取り巻く親類・友人・医師・弁護士からは異口同音に近親相姦の非難が、そして噂の広まった社交界からは疑惑の眼差しが容赦なく浴びせられた。あらゆる新聞がバイロンを嘲笑し、攻撃するなか、バイロンは別居合意書に署名し、1816年４月25日、二度と生きて戻ることのない故国を後にした。バイロンは読者の自己同一化の対象ではなく、揶揄の対象に変わったのだ。

アルバニアの民族衣装を着たバイロン（フィリップスによる肖像画）

Stephan Coote, *Byron The Making of a Myth* (The Bodley Head London)

アルプスのマンフレッド

英国から追われるようにして大陸に渡ったバイロンは、ナポレオンが英国軍に大敗を喫して１年と経たない、傷跡生々しいワーテルロー戦場跡を訪れ、己の身の上を没落したナポレオンに重ね合わせてしばし感懐にふけった。さらにライン河を遡りレマン湖に至り、湖畔に借りた広壮なディオダーティ荘でその年の夏を過ごした。この時のディオダーティ荘は、バイロンを中心とした一種の文学サロンとなった。

後に『マンフレッド』に結実してゆく原体験がなされたのも1816年の夏のことだ。それは、すでにゴシック小説家として名をなしていたマンク・ルイス（1775～1818）を８月にディオダーティ荘に迎え、ゲーテの『ファウスト』の英訳を口頭で聞いたこと、９月に友人ホブハウスと

マンフレッドがユングフラウの断崖から身を投げようとしている場面〔背後に狩人がいる〕（フォード・マドックス・ブラウンによるイラスト）

Stephan Coote, *Byron The Making of a Myth*
(The Bodley Head London)

ベルナー・アルプスの旅にでかけ、崇高な山岳風景に接したこと、である。仮にこれが『マンフレッド』の原体験とするなら、原・原体験ともいうべきものは、アナベラとの結婚前から続いていた異母姉オーガスタとの秘密の関係と、それがもとで結婚が破局に至ったことであった。

『マンフレッド』あらすじ

『マンフレッド』は全３幕からなる劇詩で、上演を意図しない書斎劇として書かれた。最初の２幕は、アルプス旅行に前後して書かれ、第３幕はイタリアで書かれた。出版は1817年６月にロンドンである。

場面はアルプス山中の城、時は中世。心中の苦悩に苛まれている城主マンフレッドは、精霊を呼び出し忘却を請い求めるが与えられない。気絶したマンフレッドに、声だけが語りかける――「おまえは、眠ることも、死ぬことも叶わぬ運命にあるのだ」と。次にマンフレッドは断崖から身を投じようとするが狩人に止められる。

第２幕、狩人の山小屋に連れてこられたマンフレッドは、狩人に「私と同じ心を持っていながら愛してはならない間柄の人を愛したことで、その人を滅ぼした」と今の苦悩の原因をほのめかす。滝を前にしたマンフレッドは魔女を呼び出し、さらに苦悩の原因を吐露する。曰く、「あの女（ひと）の容貌は、わしに似ておった。目、髪、面立ち、声の色まで全てがわしにそっくりだと、皆が言っておった……わしはあの女（ひと）を愛した。そして破滅させてしまったのだ」と。マンフレッドは、魔女に死なせてくれと懇願する。自分に服従を誓えば望みを叶えてやるという魔女の言葉を、マンフレッドは頑として拒む。しかし、「もし、わしが生を受けていなかったなら、わしの愛する女（ひと）は、いまも生きていることであろう」と語り、さらに内面の苦しみを深めてゆく。

第２幕４場、マンフレッドは、異教の神アリマネスに、死んだ恋人アシュタルテを呼び出してくれと懇願する。その幻影が現れるや執拗に許しを乞うが、明日になればあなたの地上での苦痛も終わりになります、と告げられるだけである。

第３幕、マンフレッドを説得すべく、サンモリース僧院長が城に訪ねて来る。僧院長はマンフレッドに神への祈りを求めるが、マンフレッドは頑として受け入れず、僧院長と対立したまま、決して意を曲げることもないままに息絶えてゆく。

イタリア・ギリシアのバイロン

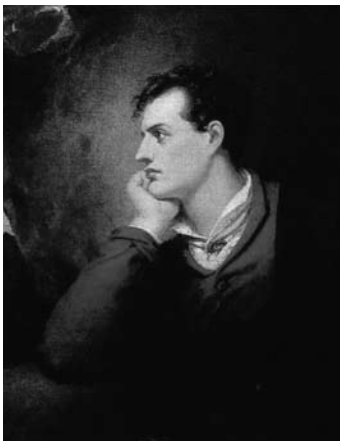
アルプス山中での『マンフレッド』原体験の後、バイロンは1816年秋にイタリアに入り、以後ヴェネチア、ピサ、ジェノヴァなどで６年半を過ごす。これは、バイロンにとって新しい局面が開けた時期であった。ヴェネチアでは服地屋の女房や、パン屋の女房の情夫になったばかり

でなく、1817〜19年の謝肉祭（カーニヴァル）の期間には、南国の習俗のなかにどっぷりとつかり、健康を害して寝込むほどであった。

しかし1819年以降、ギッチオーリ伯爵夫人テレサの公認の愛人（キャヴァリエ・セルヴェンティ）（当時、イタリアの既婚婦人が持つことを許された存在で、男性は表面上はプラトニックな関係を保ちながら、夫婦の共通の友人として振る舞うことが求められた）となってからは、その父や弟の感化で徐々に政治活動に目覚めてゆき、オーストリア帝国支配下のイタリア解放などを標榜していた地下組織カルボナリ党に入る。一方、詩作面では、アリオスト（詩人／1474〜1533）やタッソー（詩人／1544〜95）などが使用した詩形オッターヴァ・リーマを発見した。この詩形で書いた諷刺詩『ベッポー』、『決定版・審判の図』、『ドン・ジュアン』などでは、語り手が前面に出た軽妙な語り口で、頻繁に脱線する新しい諷刺詩の境地を開拓した。

1820年夏以降のバイロンの主たる関心はもっぱら、政治に移る。1823年秋、オスマン・トルコ支配下にあったギリシアの独立と解放という大義のもと、私財を投じてギリシア独立戦争に参加を決意し、数名の盟友とともにイタリアを出、翌年１月、市民らの歓呼に迎えられて、ギリシア本土メッサロンギに上陸する。その直後36歳の誕生日を機に、これまでの自堕落な過去に決別し、ギリシアの独立に全生涯を捧げる決意の詩を書くが、その３ヶ月後、志半ばにして病死する。

ギリシアの独立に生涯を捧げた英国人貴族の死は、ギリシア全土で悼まれた。「バイロンの死は、その生存中のすべての努力にも増してギリシアの統一に貢献した」とバイロン伝は伝えている。今でもアテネでは、聖母マリアが十字架降下のイエスを抱くピエタの構図で、守護神の女神アテナイがバイロンの亡骸を抱いた像が町を見おろしている。



バイロン
（リチャード・ウェストールによる肖像画）

Stephan Coote, *Byron The Making of a Myth*
(The Bodley Head London)

欧州のバイロン

1812年以降のバイロンの作品は、いずれも英国内で幾たびか版を重ねているが、海外でも早くから翻訳が始まっている。1819年にはピショーによる仏語版全集の刊行が始まり、1821年以降はドイツ語版全集も出ている。そうしたなかでゲーテ（1749〜1832）による『マンフレッド』の激賞は良く知られている――「この鬼才詩人〔＝バイロン〕は、私の『ファウスト』を完全に消化し、それを己の憂鬱を育むための養分としている。まさにこの点で、惜しみない称賛をあたえるものである」。

この発言以後に書かれた『ファウスト』第２部で、ファウストとヘレナから生まれたオイフォリオンが、高い岩場から身を投げる場面は、『マンフレッド』第１幕２場で、マンフレッドがユングフラウの山中で身投げしようとする場面、および作者バイロン自身の死から示唆を得たものとされている。

そもそも『マンフレッド』はファウスト伝説の系統を引く作品だが、マーロー

(劇作家・詩人／1564〜93)の『ドクター・フォースタス』ともゲーテの『ファウスト』とも決定的に異なるのは、バイロンでは、悪魔に魂を売り渡すというモチーフが欠落している点である。それとは反対に、精霊にも、悪魔にも、ペルシャの神にも、キリスト教の神にも決して服従することはしない。この自我意識の強烈さはバイロンだけのものと言ってよいだろう。つまり『マンフレッド』は、自我を主張することと、神(あるいは同等の呪術的または宗教的権威)を冒瀆することが等価になったロマン主義時代以降だからこそ、成立し得た作品であり、受け入れられた作品なのである。

欧州で評価されたバイロンの作品は、大きく二つの作品群に分けられる。まず(本稿冒頭で述べた所謂)バイロニックな要素をもった作品(その典型が『マンフレッド』)と、『ドン・ジュアン』に代表される頻繁に脱線する諷刺詩である。

例えば、スタンダール(作家／1783〜1842)の『赤と黒』の冒頭でレナール夫人がジュリアンと道ならぬ恋におちいる場面や、レナール氏が夫人の部屋探しをする場面は、後者の例で、バイロン『ドン・ジュアン』第1・2巻のジュアンとジュリアの関係を下敷きにしているのは明白である。ロシアのプーシキン(作家・詩人／1799〜1837)も、諷刺詩人バイロンの影響下で、『コロムナの家』や『エヴゲーニイ・オネーギン』を書いた。

バイロン最期の行動も人々に感動を与えずにはおかない。もっぱらギリシアの解放者としてのバイロンから影響を受けたのが、ポーランドの詩人・政治家のミツキェヴィチ(1798〜1855)であり、「イタリア統一の三傑」の一人とされるマッツィーニ(1805〜72)である。

こうした欧州各国でのバイロンの好評とは反対に、本国英国での評価はあまりかんばしくない。カーライル(思想家／1795〜1881)が書いた次の手紙の一節は、ヴィクトリア朝のおおかたの英国人の心情を代表弁していると考えていいだろう——「バイロンの人気は、過去10年間で徐々に下落し、今や最低に達した……彼の口からは、真に生産的な思考が人類に対して明かされたことなど、これまでかつてなかった。それどころか、どんな事でもバイロンにかかると、歪められてしまうのだ。全てに、嘘っぽく芝居がかった大げさな表現が与えられて、誠実さが感じられなくなってしまうのだ。バイロン個人の道徳性もよろしくない。人間としての行いもよろしくない」。

公平を期すためにイタリアのマッツィーニが1839年に英国の雑誌に英語で発表した「バイロンとゲーテ」の一節も紹介しておこう——「英国にやって来た外国人が、祖国の偉人の殿堂のなかを探して、詩人の碑——全欧州の国民に愛され崇められ、その死をギリシアとイタリアが、自国民の死のごとくに悼んだところの詩人の碑——を探しても見いだすことの出来ないことを、いつの日か英国は悔いることになるだろう。」

20世紀も半ば、ロンドンのウエストミンスター寺院は、詩人コーナーにバイロンの碑の設置を許可した。その銘には、『貴公子ハロルドの巡礼』から「私の中には、拷問にも時にも屈しない何か、この身が滅んでも生き続ける何かがある(There is that within me which shall tire / Torture and Time, and breathe when I expire.)」とある。

※本項の表記は筆者に従いました。

かさはら・よりみち
イギリス・ロマン派文学研究者。明星大学教授。近年の編著に『対訳　バイロン詩集〜イギリス詩人選(8)』(岩波文庫)がある。